



公益財団法人 日本知的障害者福祉協会

会 長 **井上 博**

日本知的障害者福祉協会が実施する通信教育の歴史を紐解くと、1970年（昭和45年）より50年の歴史を歩んでいます。

私たちの先人は、知的障害のある人の幸せを考えた際、彼らの最も身近に関わっている私たちスタッフが障害のある人を理解することが重要であると考え、この通信教育を始めたのだらうと思います。このことは50年が経過した現在でも少しも変わりはありません。

本通信教育が始まった当時から見ると、知的障害のある人への考え方はもちろんですが、法律や制度の在り方も大きく変わっています。

障害名も「精神薄弱」から「知的障害」へと変わり、関わり方も「指導」から「支援」へ、環境も「集団」から「個別」へと、入所施設での集団生活から地域での暮らしへと理念と制度は変化してきました。

そして今、「共生社会実現」のためのソーシャルワークが利用者支援の実践の基本となる時代を迎えています。意思決定支援が注目されているように、これまで以上に障害のある人のかけがえのない人生の充実を実現するための支援にも着目される時代となりました。

人生においても日々の支援においても、私達が最も警戒すべきは、惰性・マンネリズムというものです。利用者の生活にかかわる私たちの仕事は一見すると単調な日常の繰り返しのように思えることが多く、マンネリズムに陥りやすいのです。

池の水も淀むとやがては濁って腐敗してしまいます。しかし、水滴が落ちるほどのほんのわずかな通水であっても、池は新鮮な状態を保ち多くの魚が住むことができます。

日々新たに、障害のある人とスタッフの皆さんの人生をより豊かなものとするために本協会の実施する通信教育の活用をおすすめいたします。本通信教育の学びを通して、利用者のよき理解者となり彼らの中にある様々な可能性を開花させていただきたいと思います。

皆さんの受講を心よりお待ち申し上げます。



人材育成・研修委員会

### 委員長 **松下 直弘**

明治の時代に活躍した福沢諭吉、慶應義塾大学の創設者でもある彼は、政治家や官僚ではなく民間の立場から近代日本の発展を願い、のちの日本人に大きな影響を及ぼしながら新時代を切り開いた人物でもあります。その福沢の代表作と知られる著書に「学問のすゝめ」があります。

福沢はこの著書のなかで、私たちが学ぶこと目的とは「判断力を確立すること」であり、「判断力をもって決めたことをやり続けること」としています。そしてその実現のためには“実学（実際に生かせる学問）”として「読書」、「観察」、「推理」、「議論」、「文章を書く」、「演説」の6つが重要であると説きます。

具体的に「読書」とは書物を通じた学習成果を行動に移すこと、「観察」とは行動による変化や気づきをいち早く掴むこと、「推理」とは読書・観察から得た情報を基に自分の考えを形成すること、「議論」とは読書・観察・推理を通じて形成した考えを人に伝え相互に知見交換をすること、「文章を書く」とは推理・議論によって洗練された考えを文字で伝えること、そして「演説」するとは人前で自分の考えを自分の言葉で説明をすることであるといえます。

およそ150年前の書籍ですが、「読書・観察により自分の考えを形成し、人との議論を通じて洗練された考えを人に伝える力」とは、現代社会だけでなく、私たち福祉従事者にとってもソーシャルワークあるいは事業所での支援プロセスにも通じるものと言えます。

この観点からも知的障害援助専門員養成通信教育は、知的障害福祉に特化した専門知識を習得できる講座として「読書」の実学に相当するといえます。今日、多様性が求められる社会の中で、本講座による学びを皆さんの実践に活かし、学ぶこと目的として福沢が150年前に私達へ託した判断力を携え、高い専門性をもって利用者やあなた自身の未来を共に描いてみませんか。